

欲望の代償は

一つの仕事と割れた爪

※この小説には、BL・やおい・耽美

と呼ばれる表現、性描写が含まれています

北垣の勤める会社は市街地の中心にあった。白亜のビルには目立たないように監視カメラが設置してあり、一般企業とは少し趣が違う。ビルは四階建てで一階ではフラワーコーポレーションという金融会社があり、資金難の中小企業の融資や個人相談を行っている。二階はその会社の事務所で従業員は十名程度。皆清潔な格好と愛想のよい表情をしていて明るい雰囲気であった。いわゆる高利貸しの街金なのだが、貸し渋りの大手銀行よりよほど融通がきくと中小企業からはなかなかの評判だ。

そんな会社を取り仕切っているのが秋本という男で、華鳳会系暴力団員である。北垣の舎弟の一人で、いずれ複数企業を任される立場にあるインテリヤクザだ。

華鳳会は巨大な組織で、傘下の組は全国にござんとある。夜の商売で上納金を上げるだけでは毎年経営が成り立たないのが実情だ。

「北垣よお、地産地消って知ってるか？てめえ

の所で作ったものをてめえで消費するってこつた。これからはケツも自分で拭く時代だ。商才がないとヤクザもおまんま食い上げてね」

とは、北垣の兄貴分である南田の談。会話の内容が明るいのは、彼の下に北垣がいるからに他ならない。スキンヘッドに背中一面に刺青のある根っからのヤクザ面である北垣だったが、頭がよく、経営手腕もあつた。上納金の折り合いから、傘下企業の経営指導などに豪腕を振るい、南田をはじめ、彼と繋がりのある組は黒字が続いている。しかも手が後ろに回らない方法で、というから彼らの笑いは止まらない。

「ニイさん。ちよつと宜しいですか」

そんな北垣のいる四階の役員室に秋本が顔を出したのは丁度十二時を回ったところで、彼は以前独立した男の経営状態をチェックしているところだった。

「なア、秋本。この深町って男はなかなかどうしてやりやがるぜ。昨年まで赤字のどん底だつ

たところが今年は若干ながら黒字に傾いてる。  
こりや、ウチで貸してる金も戻ってくるかもな。  
もう少し様子みてやれや」

秋本はドアを閉めて、北垣の座るデスクの前に立つと、静かに頷いた。

「島崎興業のことですね。前回視察にいった者からも、会社の雰囲気は明るくなったと報告を受けております。返済期限、少し様子を見ることにします」

「そうしてやれ。で、お前の用件は何だ」

北垣は煙草に火をつけて、目の前に立つ落ち着いた物腰の部下を眺めた。静と動にメリハリがある男で、金融業を管理しているとは言っても自分がヤクザだということを決して見失わない男だった。

「実は、下にその深町さんに世話になった、という若者が来ておりましてニイさんとの面通しを希望しております」

「へえ」

北垣は灰を落とした。「名前は？」

「遠藤真二と名乗ってます。これが名刺です。

調べたところによると、確かに深町さんの所属企業にそのホストクラブはありますが、名刺なんてどこぞで拾ったとしても分かりはしません」

「会わねえ方がいいって口ぶりだな」

秋本は静かに頷く。

「ホストクラブなど源氏名ばかりで信用できません。明らかに作威的な何かを感じます」

ふうん、と北垣はニヤついて紫煙を深く吸い込む。そして目の前の男の顔に吹き付けた。

「秋本よお。表面ばかり見ると足元救われるぜ。ここで考えるのは、どうして深町の傘下のヤツが俺のところに来たかということなんだよ。ヤツはここから出てから一度も顔を見せに来ねえ。元々ヤクザを軽蔑してたところがあつたから今は見事にカタギに化けてやがる。俺との繋がりも表面的には知られてないはずなんだ」

「では、一体どこから？」

「さあて分からねえな。まあどっちにしる会えば分かるだろう。そろそろデスクワークも飽きたところだ。その遠藤とやら、俺の前につれて来いよ。たつぷり可愛がってやるぜ」

「畏まりました」

慇懃な態度で頭を下げ、秋本は部屋を後にした。その十五分後には同室にて、盛大な悲鳴がこだますることになる。

あるラーメン店に出前の注文が入った時、店は大変ごった返していた。安さとボリュームが人気で昼ともなればサラリーマンで込み合う。出前の電話も多く、その注文は他のものと混じってあまり目立つことはなかった。

「おい、バイト！次ここの出前に行け！」

「はい」

店の活気とは間逆の声を返したのは、黒髪の青年だった。制服である黒いポロシャツに自前のジーンズを履いている。前髪が長く、隙間か

ら少し釣りあがった瞳が覗いていた。

「お得意様だから失礼のないようにしろ」

調理を終えたチーフスタッフが一言釘を刺してオーダー表と料理を渡すと、青年は黙ってそれを受け取った。彼は運転免許を持っていないため、出前先は近所のみに限られていた。住所は店から程近い雑居ビルで一階にある金融会社だった。

「おい聞いているのか？」

返事もせずに淡々と岡持ちに注文の品を納め出した青年にチーフは声を荒げると、彼はちらりと前髪の隙間から瞳を覗かせ口元を歪めた。

「そんなに怒鳴らなくても、聞こえています」

「てめェ！」

「いってきます」

激昂したスタッフを嘲うように青年は言い、

岡持ちを持って店を出た。

自転車で十五分と掛からぬところにその場所があった。フラワーコーポレーションという金

融会社は、白亜のビルにモダンなデザインをしていた。青年は汚れのない壁に自転車を立てかけると、岡持ちを持って入口に入った。

店内には数名の客がいた。猫背の年配の男と作業着を着た男。ハデな格好をした女性。皆がカウンターに座り、なにやら金策について話合っているようだった。

「ホームラン軒ですが、ご注文の品をお持ちしました」

青年は客のいないカウンターに岡持ちを置くと抑揚のない声でそう告げた。商品を出そうと蓋を開けたところで、窓口の女性の反応がおかしいことに気づく。

「あの、何か？」

青年が尋ねると、彼女は「誰か注文してたっけ？」と首を傾げながら席を立つ。そしてカウンターの向こうで困り果てていた。

この忙しいのに注文間違いか？と青年は儼然とした。女性の動きを目で追っていると、一番



奥のデスクに座っている男と目が合う。

驚いたことに知っている人間がいた。

青年は相手がこちらに気づいたことを確認すると会釈をした。慇懃無礼とはこのことで、全身から揶揄した気配伝わるほど。

男は困惑している女性店員に二言三言言葉を掛けると、青年に向ってゆっくりと歩みを進めた。そしてカウンター越しに向かい合う。

「やっぱりただの運転手じゃなかったな」

青年は男に向って口元を歪めた。目の前の男の胸には金色のネームプレートが付いていて、秋本と書かれていた。以前、彼はこの男の車に乗ったことがあった。北垣というヤクザのドライバーをしていたのだが、身の処し方がただの運転手にしては違和感があつて以前にもそう問うたことがあった。

「聖澤くん。話は北垣から聞いています。どうぞこちらへ」

秋本は淡々とした口調で言い、カウンターの

奥へ通した。職員と客の数名は、秋本と出前の青年が一緒にいるのを不審がるような視線を向けていた。そんな居心地の悪い視線を受けながら一番奥にある不自然な鉄扉を抜けると、聖澤は思わず身震いをした。

モダンな店内とは違って奥の廊下は暗く、陰湿な空気が漂っていた。室温が数度低いような錯覚を受ける。

「こちらです」

思わず立ち止まって絶句した聖澤を秋本は即す。先程とは雰囲気が違う場所だというのに、この男の存在は空気のように馴染んでいた。改めて目の前の男が、ただのサラリーマンではなくヤクザだと思ひ知らされる。

「あそこにいたキレイなお姉サン達も皆アンタみたいなヤクザ者なワケ？」

秋本の後ろについて階段を上がりながら、聖澤は思わず尋ねた。先程窓口にいた女性従業員がヤクザだったら、人間不信になる。

「この扉は私しか入れません。おそらく彼らは自分達の雇い主の正体など知りはしない。なにせ裏にヤクザの事務所があつて怖いと噂してましたからね」

冗談なのか分からないので聖澤が片眉を上げると、秋本は自嘲したように笑つた。「事実だよ」

なるほど。だとしたら滑稽だ、と聖澤は遠慮なく笑つた。事務所の扉の向こうが裏ビルに通じているなど誰も思わず、そしてこの秋本という上司がヤクザなど夢にも思っていない。これを滑稽と言わず何と言うか。

コンクリートに包まれた階段を丁度三回折り返したところで秋本は足を止めた。踊り場から裏ビル内部に通じるであろう防火扉には、四階の表示がある。

「( )か？」

聖澤は閉鎖的な上り階段にウンザリしてそう尋ねる。手が痺れて岡持ちを左手に持ち変えた。

「どうぞ」

防火扉を支えてくれている秋本に礼を言って裏ビル内部に踏み入れると、表にある店とは違って随分簡素だった。学校の廊下のような床、染みだらけの壁。長い廊下の突き当たりに、一つだけあるドア。

あそこに北垣がいるのか、と聖澤はひっそりとため息をついた。

彼の記憶の中の北垣というヤクザは、強面で暴力的で自分勝手な男だった。以前働いていたバイト先もクビになり、学校前までベンツを乗りつけたせいで教師から目をつけられ、迷惑なことこの上ない。

ウンザリしながらも覚悟を決めてドアをノックすると中から返事がした。久しぶりに聞く北垣の声は不気味に明るい。

嫌な予感がしながら聖澤がドアを開くと、目の前でくり広がれている光景に思わず絶句した。そこは事務所で、大きなデスクが一つと来客

用のコの字型ソファがある。ファイルが収まっている大きめのキャビネット、法律関係の本。いや、現実逃避はやめよう。

目の前には折り重なった二人の影がある。

ボロ雑巾のように引き裂かれた衣類を羽織った男を、スーツ姿の北垣が犯していた。

「来たな小僧。今度のバイトはラーメン屋だってな。節操がねえ。クビになったら今度は寿司屋か？フランス料理店か？」

息を弾ませながら北垣は言い、腰を振っている。後ろから犯されている男は長い茶髪を掴まれて呻き、顔は腫れあがり、鼻血が垂れている。床を見れば、飛び散った血飛沫と抜け落ちたにしては多すぎる髪、剥がされたらしい二つの爪。

「何やってんだ、アンタ」

ぞつとして思わず聖澤が眉を潜めると、北垣は口元を歪めて答える。

「見てわかんないか？遊んでんだよ。デスクワークに飽きたからな。暇つぶしさ」

一歩間違えれば自分もああいふ風に犯されいたのかもしれないと、聖澤は冷や汗をかく。いや、過去形にするのは誤りかもしれない。

「出前、ここに置きますよ。御代はあの秋本さんって人から貰いますから」

聖澤が内心の動揺を抑えながら言い、デスクの上に注文の品を並べると、北垣が男を犯したままニヤニヤと笑った。

「どうした。珍しく可愛い反応するじゃないか」  
凶星をつかれて彼は北垣を睨み付けた。これで会うのは三度目だが、恐怖心が消えることはない。

早く逃げ出したい気持ちを抑えながら聖澤はドアに向った。ノブに手を掛け回すが、押ししても引いてもびくともしない。鍵など掛かってないことは分かっている。答えは一つしかない。

ドアの向こうで誰かが押さえているのだ。

「アンタ、どっちの味方だよ」

思わず舌打ちをして、ドアの向こうにいるで

あろう秋本に文句を言った。返事はなかったが。

「そんなに慌てずお前も楽しんでいけよ。ケツの穴は締めすぎで痛いだけだが、フェラは結構イケると思うぜ。イケるよなあ？オイ」

北垣は男の髪の毛を掴んで上下に振ったが、相手は呻くだけで返事をしなかった。聖澤から見ると、反抗する意思はまだあるようだった。

「こっちからお断りですよ。アンタと同じように噛み付かれたら堪らない」

ドアを諦めて聖澤はそう言った。以前、北垣に啜えられた時、一度だけ噛み付かれたことがあった。その時はからかい半分ではあったが、今の男相手では本気で噛み千切られるだろう。

「いいじゃねえか。お前の生意気なツラが痛みと恐怖で歪められるのを見たい」

「ふざけんな」

聖澤が唾を吐くと、北垣は目を細めた。そして背広から黒いものを取り出し、男のこめかみに向ける。それはよく昔遊んだオモチャによく

似ていた。

「お前が嘔まれそうになったらこいつの頭ぶっ飛ばしてやるよ」

外見通りに恐ろしいことを平然と言っただけの北垣を聖澤は侮蔑の混じった目で見つめた。

冷や汗が頬を伝い、顎から床に落ちる。

「いいね、その目つき。冷や汗だらけなのに、俺を軽蔑する余裕がある。早く来いよ。舐められるの、好きだろう？」

その台詞に聖澤は失笑した。北垣に近づき、虐げられている男を観察する。遠目からも酷かったが、近づいてより分かったことがある。後ろを犯されながら身体を支えている膝は今にも崩れそうで口は苦しそうに呼吸を繰り返していたが、目だけは爛々と怒りに燃えていた。

「誰がてめえのなんか啜えるかよ」

男は血まみれの唾を聖澤の靴先に掛けた。彼自身、いざ男の目の前に立ったが、とてもじゃないがジツパーを下ろす勇気がなかった。



ふいにヒヤリとした硬質な物体で顎を撫でられ、聖澤は絶句する。先程まで男のこめかみにあった銃口がこちらを向いていた。銃で顎、首筋と撫でられて、乱暴に胸倉を押し開けられる。鎖骨辺りを撫でられて、北垣を見ると、明らかに欲情した視線を聖澤に向けていた。

「硬い感触は好きじゃない」

乾燥した唇で聖澤が目の前の北垣に訴えると、彼は舌なめずりして口元を歪めた。そして虐げている男に提案する。

「おい、遠藤、もしこのガキをイカせることができたなら、てめえの独立話に乗ってやってもいいぜ」

「ホ、本当か」

男は北垣が言った台詞に猛っていた瞳を和らげ、初めてまともな音量の言葉を発した。

「ああ。深町にも話をつけてやる。但し、しっかりイカせろよ」

北垣はそう告げると、目の前の聖澤に笑いか

けた。黒髪の隙間から覗く瞳は冷たく、嘲笑が浮かんでいる。互いに睨み合い、見つめ合いながら、青年は自分のものを取り出して男に啜えさせた。その行為が淫らで。

「アンタは何をしてくれる？」

北垣は立場が逆転していることに気づいていなかった。好戦的に言われたその一言で手にしていた銃を手放した。間にある男の胴体越しに乱暴に青年の唇にしゃぶりつく。聖澤はその性急な口付けを受け止めて、自分も身を乗り出した。一物を男の喉奥にまで突っ込み、目の前の北垣に深くキスをする。

言葉を発せず二人はお互いの唇を貪りあった。いつしか北垣の目に余裕がなくなり、キスの合間に呼吸が乱れてきた。激しく腰を振り、欲情に溺れた顔をさらけ出す。そんな表情を視姦するように聖澤は眺め、北垣と舌を絡ませる。

「ッ、くっ」

北垣の眉間に皺が寄って大きく腰が痙攣した。

熱い吐息を出して射精した彼は、息を荒げながら目の前の青年の反応を見る。聖澤は嘲るように微笑んでいた。

「秋本オ」

青年の意思を確認すると、北垣は一物を抜いてドアの向こうにいる舎弟を呼んだ。穴から精液を漏らしている尻を蹴飛ばして、床に転がす。「お呼びでしょうか」

秋本は目の前の状況に動揺することなく、北垣の脇に立つ。

「裏道にでも捨てておけ。深町に拾わせろ」

目の前の男は立ち上がる力もなく、腫れあがった顔に怒りに満ちた表情をのせていた。それを汚物を見るような目で秋本は見下ろす。

「断られましたらいかがしますか？」

「断らせるな」

「畏まりました」

秋本は頭を下げると乱暴に男の髪を掴み上げた。ぶちぶちと何本か髪が切れる音がしたが、

構うことなくずるずると床を引きずっていく。その間、恐怖に怯えた悲鳴が男の口から発し続けられた。視線は唯一の部外者である聖澤に向けられ、助けてくれと手が向けられる。

彼はそんな姿を眉を潜めて見送った。止める権利などないことは自覚していた。いつしか悲鳴がドアの向こうへ消えていき、北垣が目の前に立っていることに気づいた。

「なあ、お前、あの時勃ったのか？」

聖澤は咄嗟に何を言われているのか分からなかった。

「あの野郎の口で大きくなったのか？」

そこまで言われて彼は理解した。先程の3Pの件だ。こんな時に、と聖澤は呆れたが、北垣にとって今のやり取りは日常茶飯事なのだろう。

「ああ、気持ちよかったよ」

わざと揶揄するように言えば、北垣は鼻で笑った。

「はっ、嘘つくんじやねえ。あんな野郎の舌テ

クでてめエが勃つかよ」

北垣はそう言うと自ら膝をついて、聖澤の一脚に触れた。縮こまっているそれを嬉しそうに口に運ぶ。

口に含まれてたつぷりの唾液で濡らされて、聖澤は息を飲む。自然と膨らんでいくそれを見下ろせば、強面の男が夢中で舐めあげている。美味しそうにしゃぶる姿は滑稽であり、倒錯的な快感がある。

わざと喉奥に聖澤が押し込みと、ぐっと苦しそうに北垣は眉間に皺を寄せた。先程の男の時とは違い、完全に勃起している一物を差し込まれて相当な圧迫感に違いなかった。

「気持ちいいよ」

思わず聖澤が本音を言うと、啞えていた北垣が口を離して見上げてくる。上がった顎を撫でると、目を閉じて息を荒げる。少し伸びた舌から涎がしたたり、顎を濡らした。

「まるで狗だ」

聖澤が嘲笑すると、北垣は自らスーツを脱ぎだした。全裸になって先程男がしていたように膝をついて尻を上げる。射精したはずの竿は再び立ち上がり、ぬらりと濡れたまま。背中の天女の絵はおごそかで二の腕と腰を取り巻く蛇の絵は隠微であった。ゆっくりと聖澤がその刺青の入った背中を撫でると、震えた声が漏れ、鳥肌が立った。

聖澤は堪らなくなつて服を脱いだ。肌を合わせたいと思つてしまった。

吸い込まれるように背中に顔を寄せて舐め上げると、びくびくと北垣が震えた。

「は、早く、」

性急に自分を求める声は正直で少しかすれていた。それをじらすように腰の辺りに舌を走らせ、蕾に指を入れる。いつものように抵抗なく入ってしまう。締め付けているのは反射ではなく、明らかに意志があり、視線に気づいて顔を上げれば、北垣が顔を傾けてこちらを伺ってい

た。

「あ、ア」

聖澤が蕾に唇を寄せ、舌を入れて粘膜を撫で回す。手を伸ばして立ち上がっている竿の先端に爪を立て、尿道を虐める。

「ぐ、ヤ、やめ、あぁッあッ」

痛みに呻きながらも絡み付いてくる蕾に聖澤は欲情を煽られる。目の前のヤクザは気づいているのだろうか。先程自分が辱めた相手と同じ痴態を晒していることを。

「アンタのせいで、またクビだ」

自嘲して聖澤は北垣に覆いかぶさった。肌が合わさって感じる体温は熱く優しい。首筋に吸い付きながら北垣を貫くと、悲鳴と嬌声が混じった声が上がった。

聖澤は自分の欲情に忠実になって腰を振った。北垣の穴はいつも女のように柔らかい。きつとこの男は準備してから己を呼んでいるのだ。どんな顔で穴を広げているのか想像して可笑しく

なった。

「なア、アンタここにいつも何入れてるの」

肌が当たる音、鼻から抜ける北垣の喘ぎ。床に爪を立てて快感に耐える北垣の手は先程から震えていた。その手を聖澤が上から握り締める。

「な、」

戸惑ったような声を出されて首筋を舐めると、快感を即すように蕾が緩んだり締まったりして絡みつく。

「今度は何もしないで俺を呼びなよ。狭いアンタに突っ込んで悦ばせたい」

「そんな状態でキモチイイ訳ねえだろ、知識のねえガキだな」

息を弾ませて北垣は笑う。

「いいんだよ。痛がるアンタが見たい」

「この変態が、ッあ、ッ」

「どっちが」

腰を深く進めて聖澤は苦笑した。周りには先程の男の髪の毛や血が残っている。そんな床に



先走りの液を零して喘ぐ男こそ変態ではないか。

「アッ、あ、」

北垣は喘ぎながら腰を振って聖澤を受け入れていた。重ね合わせた手は相変らず爪が立っていて、大きく身体が揺れた時に床材の溝に引っかけた。気づいたのは聖澤の方で、当の本人である北垣は夢中でそれどころではないようだった。隙間に挟まった爪は割れ、中指の爪のまわりから赤いものが染み出てくる。

「爪が割れた」

眉を潜めて聖澤は言い、腰を動かすピッチを下げた。

「急に緩めるんじゃないやねえ、よ、せつかくいきそうだった、のに、ッ、あはあッ」

文句を言いつつも感じているらしい北垣の声に聖澤は笑うと、胸の中で何かが疼いた。ゆっくりと背中に押し掛かると、北垣の耳元で囁いてみる。

「ねえ、アンタを抱きたい」

背中と胸を密着させて言われた台詞に北垣は動揺し、混乱した。しかし、ゆっくりと聖澤が腰を引いて繋がりを解くと、自然と仰向けに身体を返している自分がいる。

北垣の目の前には一人の青年。青光りするほどの黒い前髪の前こうで、凜として鋭く、艶やかな目がこちらを見下ろしている。

手を伸ばして頬に触れようとすると、爪から伝う血を丁寧に舐めあげられた。視線は北垣を射抜いたまま。

背中を駆け上がる衝動。

「早く、来い」

思わずそう口走っていた。

両足を抱くように聖澤が持ち上げて、柔らかくなっているそこに再び楔を打ち込まれる。

「ああ、」と北垣は目を閉じた。激しい快感ではないが、気持ちがいい。

北垣は聖澤の動きに酔った。ゆっくり味わうように動く腰。快感を求める種類のセックスじや

ない、これは何だ。

聖澤の真意が知りたくて目を開ければ、予想していなかったような表情が目の前にあつた。

いつも会うたびに蔑んだ目をしていた男が、微笑みながら見下ろしていた。

「な、何て顔してやがる」

呆れ、動揺し、北垣が言うと、聖澤は目を細めて言った。「気持ちいいよ」

「ば、つか野郎」

悪態をついた北垣の唇を聖澤がゆつくりと犯していく。唇を舐められ、舌を吸われて、腰の動きが急に激しくなる。

「ア、っ、てめえ、もう、」

緩急のついた動きに翻弄されて、せり上がってくるそれに北垣が眉を寄せると、聖澤も息を詰まらせた。痙攣するように腰が震えて青年の精が先に放たれたのが分かった。眉を寄せる切なそうな顔を見ながら、北垣も二度目の射精をした。快感に酔いしれるというより、不思議な

気だるさを北垣が感じていると、聖澤はそんな彼の上に倒れこむ。全体重が北垣に掛かったが、聖澤の体重は想像していたよりもずっと軽かった。黒い髪が頬に当たり、しつとりと汗で濡れた肌が吸い付いてくる。

北垣は思わず聖澤の髪の毛に触れていた。艶やかで弾力のある感触だった。しばらく撫でていて、ふと彼の頭に浮かんだイメージがある。聖澤が白いシャツに黒い蝶ネクタイを締めていて、カップにコーヒーを注ぐ姿だ。

「お前、バリスタになれよ」

頭に浮かんだ光景を北垣は口にした。

「きつと似合うぜ。俺も美味しいコーヒーが飲めるし一石二鳥だ」

「なんでバイト先までアンタに指示されなきゃならないの」

「麺類のところはやめろ。今回みたいに伸びちまって喰えたものじゃなくなる」

「だからなんで」と聖澤は失笑した。全く人の

話を聞かない男だ、と身体を起こして北垣を見れば、視線は自分を通り越して天井に向けられていた。

「そうしろよ」

聖澤に視線を合わせた北垣の目には光と鋭さが戻り、狂ったような熱は引いていた。

「もし俺がバリスタになったら、こんな風に呼びつけないと約束してくれるワケ？」

返事の予測はついたがあえて聖澤がそう聞くと、北垣は笑った。

「いやだね。てめえの都合に合わせるのなんか真っ平ごめんだ。俺の呼び出しを断りやがったら、その店をぶっ壊して、店主と店員に借金負わせて首が回らないようにしてやる」

「アンタならやりそうだ」

聖澤は苦笑しながら繋がりを解くと、脱ぎ散らかした衣服から煙草を探して一本咥えた。

「まさかアンタまで喫煙禁止っていうんじやないよね？」

以前秋本に煙草を注意されたことがあったので北垣にそう聞くと、彼は「まさか」と笑った。「俺なんか小学生の時から吸ってたぜ。俺にも一本寄越せ」

指を二本伸ばして要求されて、聖澤は煙草をそこに挟めてやった。二人分の火をライターで点けて、互いに紫煙を吸い込む。しかしすぐに北垣の眉間に皺が寄った。

「なんだよ一ミリか？軽く吸った気しねえな。ガキの吸う煙草かよ」

「悪かったね」

聖澤が文句を言った時に顔をしかめた北垣と目が合った。紫煙を吐き出しながら何かを待つように見られて、聖澤は察したように北垣に唇を寄せた。

電話が鳴る。

無粋に響き渡るベル音に北垣は小さく舌打ちをすると、立ち上がってシャツを羽織る。デスクチェアに腰掛けて電話をとった姿は、下半身

は裸のまま、上半身も前が開いていて、扇情的というより威圧的だった。目つきは先程にも増してギラついていて、正直、聖澤はヤクザであるこの男は苦手だった。

「おい、どこに行く」

聖澤が身支度を整えてドアに向うと、電話中であつた北垣から声が飛んだ。振り返ると、受話器を手で押さえてこちらを睨んでいる。

「今日はまだ時間があるんだ。勝手にどっかに行くんじゃないよ」

その言葉に聖澤は眉を寄せて笑った。

「仕事中のアンタは苦手なんだよ」

床には無造作に銃が置かれたままで、黒い穴が靴先を向いていた。何気なく手を触れると、ぞっとするほどの重量感で鳥肌がたつ。オモチヤのような質感であることは変わりないが、明らかに詰められているのはプラスチックではなく鉛だった。

北垣に近づいて聖澤がその銃をデスクの上に

置くと、押さえつけられるように手を重ねられた。立ち上がった北垣が噛みつくように聖澤の唇を奪う。激しいキスの間、電話からは怒鳴るような声が聞こえ、彼の尻から白い液が漏れて内腿を濡らした。

キスを終えて視線を絡ませると、北垣の目が再び光を取り戻す。聖澤の肩を乱暴に突き飛ばした。

「いけよ小僧。仕事中の俺は嫌いなんだろう？」  
そう言つて黒い銃を向けてきた北垣に聖澤は嘲笑を浮かべた。行くなと言つたり行けと言つたり、「そうやって脅して何人殺したことあるの」

「お前には関係ない」

「どうして？言つたほうがビビってアンタに従うかもよ？」

目を細めて聖澤が北垣を挑発すると、彼は顔を歪めて言う。その音域は限りなく低く。

「本当のことを言おうが嘘をつこうが、その答



えにお前はきつと去っていく。俺はお前を失う  
選択はしない」

銃身の黒い穴は微かに震えているのに、北垣  
の瞳は殺気と恐怖が入り混じった複雑な色をし  
ていた。それはまるでタイトロープのように不  
安定で。

「今日はやっぱり帰るよ」

聖澤は優しく笑うと軽い口調でそう言った。  
銃を持った北垣の胸に唇を寄せて丁度乳首の上  
辺りで強く吸い付く。

「っ、」と北垣が痛みで息を詰まらせると、青  
年の唇が離れた。赤く色づく華。

「電話出なよ。怒鳴っているくらいだから上司  
なんでしょ？」

デスクに置いた岡持ちを持ち上げて聖澤は北  
垣に笑いかけた。その台詞に北垣が未練がまし  
く聖澤の頬に触れると釣りあがった綺麗な瞳と  
目が合う。吸い込まれるようにキスをして舌を  
絡ませる。

「今度は電話に出ろよ、英志。言い訳して出な  
かったら承知しねえからな」

聖澤は急に名前を呼ばれて驚きながらも、苦  
笑した。

「アンタのほうこそ授業中に掛けるのやめてよ。  
アンタ社会人、俺学生。もう少し考えてくれて  
もいいんじゃないの」

「ふざけんな。誰がてめえの都合に合わせるか  
よ」

「全くアンタらしいよ」

呆れながらドアの向こうに消えていった青年  
の影と足音を北垣は追いかけて、ようやく先程か  
ら怒鳴り散らしている電話を耳に当てた。長々  
とした南田の説教を聞きながら北垣は言い訳を  
する。

「許してくださいよアニキ。ようやく見つけた  
男引き止めるのに必死でしたね」

そして新しい煙草を啜えてブラインドの隙間  
からビル下を覗く。秋本に誘導されて裏口から

出てきた青年の姿は背がピンと伸びていて美しい。

「大目に見て貰えませんかね。なにせ、久しぶりの恋なんっすから」

了

[http://park2.wakwak.com/~115\\_c/](http://park2.wakwak.com/~115_c/)